

はたらく二少年

小川未明

青空文庫

あたらしい道が、つくりかけられていました。おかをくずし、林をきりひらき、町の中を通つて、その先は、はるかかなたの、すみわたる空の中へのびています。そこには、おおぜいの労働者が、はたらいっていました。

トロツコが、ほそいレールの上を走りました。道ばたには、大きな土管がころがり、くだいた石や、小じやりなどが、うずたかくつまれていました。

はたらくものの中には、年をとったものもあれば、まだわかいものもいました。かれらはシャベルでほった土をトロツコへなげこんだり、つるはしをかたい地面にうちこんで、溝をつくつたりしました。こうして、しごとをする間は、たがいに口をきかなかつたけれど、自分をなぐさめるために、無心で歌をうたうものもありました。

やがて正午になると、近くの工場から、汽笛がきこえます。すると一同は手を休めて、昼飯を食べる用意をしました。それからの一時間は、はたらく人々にとつて、なによりたのしかったのでした。

二人の少年は、石へこしかけて、秋の近づいた空をながめていました。

「そんなら、Kくんは小さいときに、家を出たんだね。」と、Nがいました。

「そう、母親ははおやがなくなると、父親ちちおやはちつともぼくたちをかまってくれなかったから、どこかへいけば、母親ははおやのかわりに、やさしくしてくれる人ひとがあるうかと思おもつてね。」と、Kケーが答えました。Nエヌはうなずきながら、

「わたしは、ちようどきみとははんたいで、父親ちちおやの顔かおをおぼえていない。まったく母ははお親おやの手て一つで、大きおおくなったのさ。その母ははの手てだすけもできぬうちに、母ははは死しんでしまつた。」

「考かんえると、二人ふたりとも不幸ふこうだったんだね。」

「世よの中なかには、両りょう親しんがそろつて、こんな悲かなしみを知しらないものもあるんだが。」と、Nエヌはたばこに火ひをつけました。

「それでもまだきみには、やさしいおかあさんがあつたからいい。さびしいときは、いつでもおもかげを思おもいだして、自分じぶんをなぐさめることもできるから。」といつて、Kケーは自分じぶんの子こどものころのことを話はなしたのでした。

いつも、ぼくはさびしい子こどもだった。ある日ひ、桑くわ畑ばたけで、いくたりかの女おんなが桑くわの葉はをつんでいるのを見みた。なんでもその葉ははどこかの養よう蚕さん地ちへおくられるというのだった。

むすめもいれば、おばさんもいた。その中に、白い手ぬぐいをかぶった、やさしそうなおばさんがあった。ぼくは、こんなようなおおかあさんがおればいいなあと、なんとなく、したわしい気がして、そのそばへいつて、桑をつむてつだいをした。おばさんは、ぼくの頭をなでてくれた。

このおばさんは、いい声で歌をうたった。その声をきくと、ぼくは悲しくなつてしぜんに目からなみだがながれた。そして、おばさんが木から木へかわるたびに、ぼくはかごのかたすみを持つてやった。みんなの前で、はずかしいのをがまんして、すこしでもおばさんの手だすけになろうと思つた。

そのあくる日、桑畑へいくと、もうここの仕事はおわつて、みんなが、昼すぎは帰るのだという。ぼくは勇気を出して、

「おばさんのおうちは、どこなの。」ときいた。

「ぼっちゃん、遠いのですよ。あつちの港町です。もし、あつちへいらしたら、およろくださいね。わたしのうちは、停車場のすぐ前ですから。」と、おばさんが教えてくれた。

それから後も、ぼくは桑畑へいつたがまったく人がけがなかった。北の方へたれさ

がる水色の空をながめてみると、どこからか、ほそい歌声がきこえるような気がして、ただぼんやりたたずんだ。

ついに、ぼくは、ある日のこと、ほこりをあびながら、白くかわいた街道を歩いていった。港町へいけば、おぼさんにあえると思つたのだ。いつしか夕日は松林の中にならずみかけた。もう足はつかれて、これから先へいくことも、またもどることもできなくなつて、道ばたでなっていた。そのとき、そこを通りかけた自転車が、ぼくを見るとふいに止まつて、

「おい、Kぼうじやないか。」と、声をかけた。

それは、近所のおじさんだつた。

「どうして、こんなところへきた。おとうさんといつしよか。」と、おじさんはきいた。

ぼくが頭をふると、おじさんは、ふしぎそうに、ぼくを見るので、

「海を見たい。」と、ぼくはいつた。

「あはは、ぼかめが。海までまだたいへんだ。さあ、早くこれにのれ。いつしよに家までつれていってやるから。」と、おじさんは後ろへぼくをのせると、走りだした。

「Nくん、こんなようなことも、あったんだよ。」と、Kがいました。

だまってKの話をきいていたNは、たばこの火がきえたのも知らなかった。

「だれにも、にたような話はあるのかな。それで、苦しい世の中と思つても、なお生きようとするのは、いつか、いい人間にめぐりあえるような気がして、美しいゆめがもてるからですね。」

Nは、こう答えて、上着のかくしから、なにかとりだしました。それは、手ぬぐいにつんだ鏡のかけらでした。

「きみ、それは、どうしたの。」と、Kがきいた。

「あすこで、ひろったのです。Kさん、この町はわたしに思い出がふかいです。」と、こんどはNが、そのわけをKに話してきかせたのです。

わたしは、おふくろがなくなつた後、どうすることもできず、おなじ長屋にすんでいた、あんまさんのところで、せわになりました。わたしの仕事というのは毎日親方の手をひいて、あの町かどのところへくることでした。そして、親方が、尺八をふく間について、通りかかる人が、お金をくれるのをもらったのです。戦争前は、あすこに大き

くてりつぱなカフェーがありました。

夏の日の午後のこと、きゆうに空がぐらくらくなつて雷がなり、雨がふりだしました。

「夕立ちだから、じき、はれるだろう。」と、親方はいって、二人はカフェーの、のき

下へはいり、たたずんでいました。すると、ぴかりぴかり、いなずまのするたび黒い森や、

でこぼこの屋根が、うきあがつて見えるかと思つと、地球をひきさくようなすすまじい、

雷の音がして、わたしはふるえながら、親方の手をひっぱつて、もつとドアに近く身を

よせようとしました。そうすればたきのようにふる雨が、かろうじてよけられるからです。

このとき、とつぜんドアがあきました。見ると、うすべに色の長いたもの着物をきた

女、給さんが、ぱつちりした目をこちらへむけ、二人を見ながら、

「そこではぬれますから、早く中へおはいんなさい。」と、いつてくれました。

頭から顔までぬらしながら、親方は、ただもじもじしていると、そのねえさんは、わ

たしの手をとらんばかりにすすめたので、二人は、つい、すいこまれるごとく、ドアの中

にはいました。そして、わたしは生まれてはじめて、こんなに美しく、かざりたてられ

た、たてもものの中を見たのです。ふだんは、風のふきすさぶたてももの外に立つて、五色

にかがやくネオンをながめながら、中からもれる、たのしそうな音楽や心のうきたつよ

うな歌うたにききほれるだけで、煉瓦れんがのかべをへだてて、そこには、どんな世界せかいがあるのか、想像そうぞうすることもできなかつたのでした。

「すこし、おかけなさいな。」と、ねえさんがいつてくれたので、二人ふたりは、かたすみのほうにあつた、テーブルのわきへ、こしをかけました。

まだ、たくさんの美しいおねえさんたちが、立つたりかけたりしていました。わたしは、どこから、こんなうつくしい人ひとばかりあつまってきたのかと、ふしぎに思おもいました。わたしが、目めをみはつてみると、また、さっきのおねえさんが、きて、

「わたしにも、ちようど、あんたぐらいの弟おとうとがあるのよ。さあ、ひとつですけれど、おあがんなさい。」と、いつて、紙かみにのせて、おかしをくれました。親方おやかたは尺八しゃくはちをにぎりうなだれていたが、それに氣きづくつと、わたしにかわつて、礼れいをいつてくれました。

しばらくすると、雷かみなりも雨あめも、わすれたようにやみました。二人ふたりが、外そとへ出るころは、だんだん、客きやくがたてこんで、あちらでも、こちらでも、笑わらい声こゑがきこえ、それとまじつて、グラスのふれあう音おとがしました。

あのとときから、何年なんねんたつたであろうか、戦時中せんじちゆう、空襲くうしゆうで、このあたりは焼野や原のになつてしまいました。きよう、カフェーのあとで、この鏡かがみのかけらを見つけて、ひろ

いあげると、おりから空にあらわれた赤い雲がうつつて、わたしは、おねえさんのすがたを思いだしたので、記念にしようとポケットに入れたが、考えれば、やはりつまらんことですね。

と、Nはいつて、そのかけらを道ばたになげすてました。

Kはこの話をきくと、なんとなくNを、他人のような気がしなくなった。そして、早くから親をなくした子というものは、すこしかわいがつてくれるものがあれば、こんなにも恋しく思うものかと、つくづく感じたのでした。

「そうさ。むかしのゆめなんか、なんにもならんよ。ふきとぼして、希望をいだいて強く生きぬこうぜ。ぼくたちは、もうはたらける年になったんだもの、だれからも、ばかにされない。これから、おたがいに力になろうよ。」と、NをはげますようにKはいいました。「ああ、ゆかいだ。きみと、どこへでも、いっしょにいきましょう。」と、NがKの手にぎると、Kもまたかたくにぎりかえしました。

かれこれ、休み時間が、きれたとみえます。あちらから、トロツコの走ってくる音がし

ました。すると、一同^{どう}が立ちあ^たがった。二人^{ふたり}も、また、元^{げん}氣^きにシヤベルをもちました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「少女少女の広場」

1949（昭和24）年3月

※表題は底本では、「はたらく二一少年《しょうねん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はたらく二少年

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>